

ことばの字び



言葉を育む

身体を通して

ESSAY 「もしも」の力 為末大

特集

身体を通して言葉を育む

- 改めて「声の復権」を考える 町田守弘
- 演劇的手法を活用した国語の授業 渡辺貴裕

授業アイデア

「演じる」ことで心情の変化を読み取ろう
～「空中ブランコ乗りのキキ」～
山崎めぐみ

Number
24

「もしも」の力

為末 大

私たちスポーツ選手が指導をするときには、どんな言葉を使うのでしょうか。例えば子供がドタドタ走っているとき。もっと軽快に足を動かすと速くなるはず。そんなときに「足をもっと速く動かして」と言ってもなかなかうまくいきません。じゃあどうするのか。例えば「フライパンの上を走っているように」と言うと、途端に子供達の足は軽快に回るようになります。だつてずつと地面に足をつけていたら熱いですからね。

人間の身体はまわりの環境に合わせて動いています。紙コップを持つときと、重たい鍋を持つときには、力の入れ方が違います。普段は意識しませんが、私たちは無意識に自然に環境に合わせて力の強弱を使い分けています。だから言葉で上手に環境をイメージさせると、勝手に動きが変わっていくのです。

でもどうしてなのでしょう。足を速く動かしたいなら「足を速く動かして」と言えばいいのに。それは人間が切り離せないからです。右足を前に出すとき、左足は地面を押して片足の状態を支えています。それから少し左に重心も傾けています。何かをしないと必ず全体もそれに応じてバランスを変えます。だから、身体全体がついそう動いてしまうような外部の環境をイメージする方が自然なんだと思います。

私はこれを「もしも」の力と呼んでいます。「もしもハードルの上に襖ふすまがあつてそれを蹴破るように跳ぶとしたら」「もしも足元に空き缶があつてそれを踏み潰しながら走るとしたら」。こんなふうに「もしも」の力を使いながら、コーチングしていきます。だんだんこの使い方

がわかっていくと、自分でも使いこなせるようになるんです。目指す動きが自然と出てくるような「もしも」を探していくわけです。

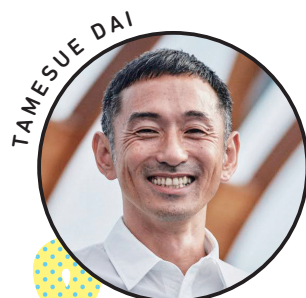
この「もしも」の力を身につけるには、とにかくたくさん身体を通じて体験することです。いろんなものを触ってみる。いろんなところに立ってみる。そうすることで、世界を身体で感じ取って、「もしも」を使いやすくなります。もう一つ大事なことは、相手がどんな世界を生きているのかをよく想像することです。例えば「正座をしているときのよう」と言っても、正座をしたことがない国の人には伝わりません。相手がどんな人生を送り、どんな体験をしてきたかが想像できるとより豊かに「もしも」の力を使うことができます。

私は時々想像することがあります。「もしも体育の授業と国語の授業が一緒だったら」そしたらもしかして「もしも」の力が授業に入るかもしれません。

逆上がりが苦手な友達がいます。あなたならどんな「もしも」を言ってあげますか？

Profile

ためすえ・だい 東京大学先端科学技術研究センター教授。1978年広島県の生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400メートルハードルの日本記録保持者(2026年6月現在)。人間の可能性と社会包摂をテーマに研究・発信を続ける。著書に『熟達論』(新潮社、2023年)、『諦める力』(小学館、2018年)など。



TAMESUE DAI

特集

身体を通して言葉を育む

改めて「声の復権」を考える

早稲田大学名誉教授 町田守弘

「身体を通して言葉を育む」という特集名からまず思うのは、言葉の学びにおける「声の復権」の必要性です。本稿では声の活動に焦点を当てて、特集テーマを考えてみます。

かつて『声の復権と国語教育の活性化』(明治図書、二〇〇五年)というタイトルの著書をとめたことがあります。顔を突き合わせての声による対話がコミュニケーションの原点にあるはずなのに、子供たちを取り巻く言葉の環境は、声が本来の役割を果たせていないような気がいたします。そこで国語教育の活性化のためにも、声の復権に真剣に取り組む必要があるのではないか、という問題意識に基づいて、声に関わる具体的な提言と、関連する実践をまとめたものでした。

それから約二十年が経過した二〇二四年の五月に、『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会

では「国語科における『声』の復権」という特集が組まれました。その「問題提起」の中で森田真吾氏は、拙著で扱った問題に言及したうえで、「学習者の『声』をめぐる状況はさらに深刻化している」と指摘されています。

深刻化した要因の一つはコロナ禍の問題であり、いま一つは一般社会におけるSNSの普及や学校でのICT化の進展にあると、森田氏は述べています。そして二〇二六年現在、さらに配慮しなければならぬ現象として、生成AIの出現とその急速な拡充があります。このような状況は時代の流れから不可避なものではありますが、国語教育における声の復権という課題からは、ますます乖離してしまふような気がしてなりません。

声の活動の活性化のためには、まずは声を発するための具体的な場面を、授業の中に設定することから出発してみたいと思います。日本の伝統的な一斉授業の形態において、生き生きとした声の活動を成立させるのは難しいという側面もあるでしょう。そこで発表や話し合いのような活動を、常に授業のさまざ

まな場面に設けることを工夫してみたいものです。

そのうえで、「話すこと・聞くこと」の領域に関わる具体的な単元を積極的に開発するようにできれば効果的です。例えば、スピーチや語り、音読・朗読、読み聞かせ、聞き書き、演劇など、声につながる活動は多いはずです。また、ワールドカフェやトークフォーカダンス、さらに「学習センター」の試みなども検討できるでしょう。

身体を通して言葉を育むことは、これからも重要な課題となるはずです。改めて声の復権に取り組んでみたいと思います。

Profile

まちだ・もりひろ 早稲田実業学校中・高等部教諭、早稲田大学教育・総合科学学術院教授を経て、名誉教授。専攻は国語教育で、サブカルチャーを活用した教材開発・授業開発に関心を持つ。主な著書に『「サブカル×国語」で読解力を育む』(岩波書店、2015年)、編著に『サブカル国語教育学』(三省堂、2021年)などがある。



MACHIDA MORIHIRO

演劇的手法を活用した 国語の授業

東京学芸大学教職大学院准教授

渡辺貴裕

演劇的手法が脚光を浴びている。能動的な学習形態の模索、コロナ禍の沈静化などが背景にある。ここでの演劇的手法とは、身体を動かして架空の世界を生み出し、その中で何かになつてふるまうことを通して学習を行う活動のことを指す。脚本があるとは限らず、また、観客に向けての上演を伴うとも限らない。「ドラマ」とも呼ばれる。

元々演劇を愛好してきた層以外の教師にも演劇的手法への関心が広がるのは、言葉の学びの幅を広げるうえで喜ばしいことだ。が、懸念もある。それは、演劇的手法が、その持ち味を引き出されないまま表面的な使われ方をしかねないという問題だ。以下、二点示す。

✓ 頭で考えたことを 実行させるだけになっていないか

登場人物の様子や心情を考える↓それに応じた表現の仕方を工夫する↓考えた表現を実行する↓ねらい通りに表現できたか、振り返りをする

役になって演じる活動を行う際に、よく用いられる流れだ。もしかすると、特に何も疑問に思われないかもしれない。けれども、演劇的手法の持ち味という点からすると、この図式には難点がある。それは、頭で解釈しておいたことをやってみせるだけで、「理解から表現への一方通行」(『なつてみる学び』)になつてしまっているということだ。

演劇的手法においては、演じる、つまり、役になつて空間の中を動いたり他の登場人物と関わったりすることによって、何かが感じられたり、思つてもみなかつた表現が引き出されたり、それらを通して気づきを得たりする。そこに本来の持ち味がある。「表現と理解の相互循環」(同右)にあたるものだ。

「この登場人物は悲しい気持ちだろう→悲しそうに読もう」。これでは表現は平板なものにしかならないし、演じることによる新たな気づきもない。そうではなく、まずその状況をつくり出し、その中で動いてみることだ。そこでいろいろ試せばいい。あえて笑いながら読んでみてもいい。それによって、むしろ悲しみが凄みをもつて迫ってくるかもしれない。

✓ 空間をつくり出せているか

「表現と理解の相互循環」を可能にするた

めの鍵となるのが、相互作用が生じる空間をつくり出すことだ。登場人物に「なる」ということは、単体では成り立たない。周囲との相互作用によって成立する。

「走れメロス」(太宰治)の冒頭場面を例にとろう。シラクス町の、メロスと老爺のやりとり。老爺は、メロスの詰問に対して、「辺りをはばかる低声で、僅か答える」。「王様は人を殺します。」と。

この場面、老爺だけを取りだして、生徒に、「辺りをはばかる低声」を考えさせ、そうした声の調子で「王様は、人を殺します。」のセリフを言わせたとしても、それでは、ただ「それっぽく言わせただけ」の活動だ。ここで必要なのは、老爺として思わずふるまってしまうような、この場面の老爺をこの場面の老爺として成り立たせているような、そうした状況をつくり出すことだ。

「辺りをはばかる」。何を警戒しているのだろうか？ 警吏が見回っているのか。町の人に密告される恐れがあるということか。実際にそうした空間を教室につくり出せばよい。

老爺がメロスと話しているのを家の中から窺いながら、ひそひそ家人と話す者。かかわり合いになりたくない、と、鑑戸を閉める家。警吏が通りかかる。これら一つ一つに、老爺

走れメロス

● 成功の鍵：相互作用が生じる空間をつくり出すこと

(ここでは)老爺が思わず「辺りをはばかる低声」で話してしまうような状況をつくり出す



他にこんな活動も……

- 「にぎやか」だったかつてのシラクスの町と、「ひっそり」している今のシラクスの町とを、集団でつくりだす。そのなかをメロスになって歩く。
- 王城での王とメロスのやりとりを、王、メロス、家来の役を設けてやってみる。相手のセリフはどのように自分に響いてくるか。家来はどのようにこのやりとりを見守っているか。
- 王は、「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。」と述べている。王はこれまでどんなできごとを経験してきたのか。グループでシーンをつくり、それらを続けて発表する。

Profile

わたなべ たかひろ 東京学芸大学教職大学院准教授。専門は教育方法学、教師教育学。研究テーマは、演劇的手法を用いた学習、実践の省察のための対話など。「学びの空間研究会」主宰。著書として『なつてみる学び—演劇的手法で変わる授業と学校』(藤原由香里と共著、時事通信出版局、2020年)、『教師のためのリフレクションと対話』(日本標準、2026年)など。



WATANABE TAKAHIRO

はビクツと反応する。こうした環境のもとで行うメロスとのやりとりは、わざわざ頭で考えておいたものを実行しようとしなくても、自然と「辺りをはばかる低声」になる。これは、老爺としてこの世界を生きているということである。また、メロスや町の人(の役の人たち)と共に、「走れメロス」の世界をつくり出しているということでもある。こうした場合にこそ、演じることは気づきをもたらす。「静止画」(ピタッと止まった状態で場面を表現する)、「ホットシーティング」(登場人物の役になった状態で質問に答える)など、ドラマの技法の認知度も上がった。が、授業でそうした技法が先走る例もしばしばだ。登場人物としてその世界を生きる。それが可能な空間をつくる。そうした基本に立ち返りたい。

授業アイデア

1年

「演じる」ことで 心情の変化を読み取ろう

「空中ブランコ乗りのキキ」

高槻市立五領中学校 山崎 めぐみ

授業の流れ【全5時間】

指導事項「1年」(1ウ・オ)・(Cイ・オ)

第1・2時

全文を読み、登場人物の情報を探し、相互関係を捉える。

「空中ブランコ」「ピエロ」「波止場」などの言葉のイメージを画像で捉え、共有する。

第3時「本時」

導入

前時の復習と学習目標の確認。

登場人物との関わりの中で変化する、中心人物「キキ」の心情を捉えることと、「演じる」という活動を通して学びを深める目標を共有し、見通しをもつ。

展開1

描写をもとにキキの心情を捉え、表現を考える。

場面ごとに「キキ」や他の登場人物の心情が表れている描写を探す。

指導上のポイント

前時に学習した登場人物の相互関係の中で変化していく心情を、描写をもとに捉えられるよう支援する。またどんな心情でいるのかを短い言葉で表現させ、心情を表す語彙が豊かなようになるよう指導する。支援が必要な生徒には心内語を書かせることで、心情が捉えられるよう促す。

4人班で見つけた心情描写を交流し、①どんな心情を表しているか、②どのように変化しているか、について考えを深める。

展開2

配役に沿って演じ、心情の変化を捉える。

班でそれぞれの場面において役を割り当て、役になりきって読む。班内で役割を交替しながら表現し、心情理解を深める。

生徒反応例

- 団長さんとの場面ではキキの不安な様子に比べて、樂觀的な「団長さん」との差が際立っている。
- ロロとの場面では「人気」に対するキキとの考え方の違いが表れているね。キキを心配しているロロに対して、平行線なキキのセリフをどう表現したらいいんだろう。
- おばあさんとの場面では、一言ごとに気持ちが揺れ動いているね。特に「そうですか……」「そうですね……」「は」一文字の違いの中に、キキが追い込まれていく気持ちが表れているのではないかな。

まとめ

演じたことでより深められた心情の変化を考える。

班の考えを理由とともに全体に共有する。

第4時

「キキ」の判断や行動について自分の考えをもち、クラスで共有する。

第5時

比喩表現について知り、本文中の比喩表現の効果について書く。

授業のまとめ

初読時から登場人物それぞれのキャラクターに魅せられ、後半には役に分かれて演じることを伝えると歓声があがった。本時では表現したいことと実際にできることに難しさを感じる一方で、「もっとやりたい」「違うように話してみるから聞いて」と前のめりになる様子が見られた。また相手の演じる内容から、自分だけでは気づけなかった心情描写を発見し書き込む手が止まらない様子も見られた。「声に出して演じる」にはただ「読む」だけではできない、深い心情理解がもたらされた。机上の文字を追うことが多い教科書ではあるが、身体を通して学ぶことの可能性を感じた。

この授業について

「空中ブランコ乗りのキキ」は「竜」に続いて学ぶ文学的文章です。劇作家別役実による、会話を中心としたいきいきとした作品であり、入学当初に実施した「教科書探検」の学習でも多くの生徒の興味を引いていました。この単元においては、登場人物相互の関わりにもまず学習の主軸を置き、その後描写から心情の移り変わりを読み取る学習へと読み深めていきます。本時は役になりきって演じる、という自身の身体を通して学びを深めることを目的にしています。アニメーション等に触れる機会の多い生徒にとって身近でありながら深い心情理解を求められる課題設定となっています。

推しポイント!

「難しい、でもやってみよう」
ペアや班で学び合いながら声を出し、心情理解を深めていく。

【個人・ペア】

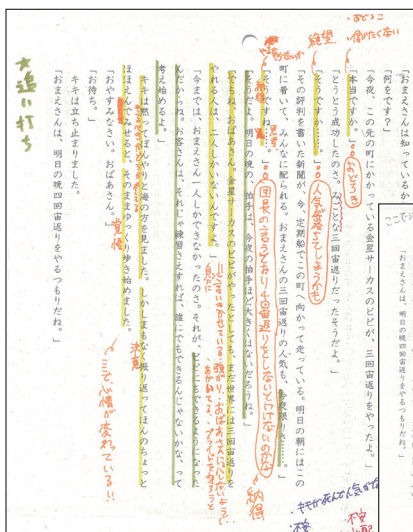
- 本文の描写から心情が読み取れるところに線を引き、どんな心情かを書き込んでいく。
- 平仮名一文字の違いや「……」などにも目を向けさせる。
- ペアに聞いてもらいながら役を演じ、より工夫できるところなどアドバイスをもらう。

【4人班】

- それぞれの役を演じてみる。ナレーターはストーリーテラーであるとともに観察役。
- 互いにアドバイスをもらったたり役を入れ替えたりして、心情理解をより深めていく。



教科書本文プリントに
びっしり書き込まれた
キキの心情。互いに声
に出して演じてみるこ
とで更なる発見が生ま
れていく。



三省堂教科書・教材サイトでも、「授業アイデア」をご紹介します。





中学校・高等学校国語科

読解方略×ICTで「読むこと」の授業は進化する

佐藤佐敏 上山伸幸 編著

読解方略とは、言わば調理法である！

〈情景描写〉〈回想・反復〉〈図表と文章〉〈抽象と具象〉など、汎用性が高い17の読解方略の解説に加えて、方略の習得とICT活用を組み合わせた22の授業実践例を収録。授業づくりに役立つ実用的な一冊。

定価 2,310 円 (本体 2100+税 10%) / A5 判 / 152 ページ / 978-4-385-36113-0



琉球列島に根ざした言語文化と学校教育

北日本とつながり、継承と創造的発展をのぞむ

中本 謙 村上呂里 編著

琉球列島の言語文化の歴史を振り返って先人たちの願いを汲み、蓄積されてきた優れた実践事例を集約しながら、今後の学校教育における琉球列島の言語文化の継承発展を展望する土台とする。

定価 1,760 円 (本体 1600+税 10%) / A5 判 / 272 ページ / 978-4-385-36117-8

ことまな学校サポートサイトのご案内

ことまな学校サポートサイト

「ことまな学校サポートサイト」では、指導書に付属する各種データの他、指導や評価に活用できるさまざまなデータをご提供いたします。

- ☒ パソコンで DVD-ROM を読み込めない
- ☒ 複数の先生で指導書を共有している
- ☒ 授業に役立つ資料がほしい

このようなときにご活用ください。



ことまな学校サポートサイトでダウンロードできる資料

- 教師用指導書に付属の「データ資料集 DVD」収録資料の全部
- 「小倉百人一首」の朗読音声 ● 古典教材の現代語訳(教科書に全訳を示していない教材・章段)
- 「矛盾」の書き下し文 ● 単元ごとにまとめた教科書紙面の総ルビ PDF など
- + 教師用指導書の補充データ「総ルビ本文データ」 + 教科書対応 Google フォーム「文学史クイズ」「テスト問題」
- + 漢詩の補充資料(教科書に掲載している作品の解釈・構成・現代語訳・語句の解説)

ことまな学校サポートサイトは、令和7年度版『現代の国語』『現代の書写』の指導書をご採用いただいている学校ごとの専用サイトです。ログインには、ID とパスワードが必要です。



三省堂 小・中学校 教科書
LINE 公式アカウント
はじめました!

授業のお役立ち情報を
定期的に配信中!



三省堂 〒102-8371 東京都千代田区麹町5-7-2

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。